The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和歌
Author(s)	林田, 良平
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 199-200
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88848
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大窪久光

一死鴻毛苦節臣。自謀大事丈夫眞。報恩壯志堅於鐵。三百年前有此人。

一定文八

鳴門決死志堪憐。却見全生七十年。淡路山陵長奉職。不聞啼血一聲鵑。

歌

石鏃集

林田良平

五月山ところどころに土器いでゝ神代はるけく見る櫻かも

うぶすな杜のあしたを土器石器あまた拾はむわが里のため

葉櫻の蔭はや暑し石器などひろふに蚋の眼にぞまつはる

傘さして見にも行かむかうぶすなの杜の石器にさみだれの降る

神代人うべも住みけり水もあり眺め日あたりよき山にして

巧みなる石の鏃を惜しげなく射はなちたりしその世おもほゆ

鳥狩すと葉山茂山わけ登り石のやじりを射はなたばいかに

日も時もしらで石器をとぎにけむ人の手馴れのこの砥石はも

土器石器あまたあつめて三千とせの昔にかよふわが心かも

加茂の畑桃さくもとに石器ひろふ腰をのしても眼は土にあり

雨あとは石器見やすしとわが來れば畑を耕桃の散りおほひたり

桃の實の熟れて得ゆかぬ加茂の畑石器は雨に洗はれてゐむ

小竹の葉

仲田應弘

昭和五年十一月十六日、奈良にて

霜枯れし芝草の丘に並み立てる馬醉木(あしだ)の茂り雨にうるほふ

昭和六年四月二日、森繁夫氏邸

小竹の葉のさやぐ窓先うすら日のうすれ又さし時たちにけり